
アフィニア日誌

皇 圭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アフィニア日誌

【Nコード】

N3648Z

【作者名】

皇 圭介

【あらすじ】

あこがれの先輩に3度目の告白にしてOKをもらえたその日、彼は異世界に召喚されてしまう。「我々を救ってください」と詰め寄る黒ローブたち。

え、なにこれ。俺ってば勇者？そんなことより元の世界に返して。「先輩との仲はこれからなんだよおおおお！」

00話 「暗転」

学校帰り、一人土手を歩く。

その日は記念日になった。

夏休み前のその日、俺の顔はだらしく笑み崩れていたと思う。

「
〜
」

なにしろ1年間近く好意を抱き続けていた部活の先輩に、告白してやっとOKをもらったからだ。

ライバル
恋敵は多く、その戦いは長く苦しいものだった。

告白は3回。

一度目は「あなたのことが知らないから」

自分の事を知ってもらおうよう努力した。

2度目は「頼りない弟みたいにおもってるから」

頼りがいのある男になるよう、勉強も部活もがんばった。ついでに弁当で餌付けもした。

そして3度目「君には負けたよ。こんな気持ちにさせられるとは思わなかった」

「
ふふふふふふ
」

いや、気持ち悪いとかいわないで。だってしかたないじゃない！
幸せなんだもの！

今なら夕日に向かってだって走れる。

そう、どこまでだって！

先輩とのこれからの夏休みを想い。

ウエディングベルの鐘の音を聞き。

子供は何人がいいかなあと完全に頭が湧いたところで。

目の前が真っ暗になった。

（え、え、え、何！？）

グラリと倒れる感覚。

顔面で感じた痛みとひんやりとした地面の感触が、その時感じた
最後だった。

「……成功か？」

「……おそらく成功だろう」

まわりで聞こえる声。少なくとも一人二人ではない複数人の気配。

ぼんやりする頭を一生懸命働かせる。

（病院かな・・・？）

随分硬いベッドのようだが、そこに仰向けに寝かされている。
力を込めてみるが、腕どころか指すら動かせない。

（俺、いったいどうなって・・・？）

まったく自分の自由にならない体と格闘すること数分、なんとか
まぶたを開ける事に成功する。
だが、そこにあったのは病院の白い天井ではなかった。

（え・・・なにこれ）

見えるのは岩肌。薄ぼんやりと照らされた岩肌が視界いっぱい
広がる。

（洞窟・・・？）

まったくわけがわからない。
何故、自分がここにいいのか。
なんでこんな所に寝かされているのか。

（夢・・・？）

とにかく、情報がほしいとばかりに唯一自由になる目であたりを
窺う。

うわ、なんかいい。いい。

寝かされた自分を囲うように、黒っぽいローブを着た人がいつぱい。

うわ、目が合っちゃたよ。

「おお・・・、お目覚めになられた・・・！」

騒がしくなる周り。

何かなんだかわからない。この状況で体一つ動かせないなんて怖すぎる。

（夢、夢、夢、これは悪い夢）

まぶたを閉じれば夢が覚めて、先輩とのハッピーライフが始まるのだ。

現実逃避ぎみの俺。

だがそんな事など関係なしに状況は進む。

「お目覚めの気分はいかがですか？エメランデイス様」

黒ローブたちの集団を割るように、濃い化粧の女が現れる。

30代前半といったところだろうか。

いや、それよりも・・・。

（エメランデイスって誰・・・！）

俺？俺が呼ばれてるの？何故何どうして？

「目覚めたばかりで混乱されるのも無理はありません」

「ですが、我々の話をどうか聞いていただきたいのです」

混乱する俺のことなどほったらかしでどんどん話を続ける女。
わけがわからないなりに理解した事は、

今、彼ら（黒ローブたちね）は悪逆非道な者たちによって滅ぼされそうになっている事。

起死回生として、太古の禁呪を使い俺をこの世界に呼び出した事。

「どうか、我々を救ってください」

待つて、待つて、待つて。

これってもしかして。

小説とかでありふれたアレ？

魔王で勇者なファンタジーもの？

もしかして魔王とか倒さないと、もとの世界に戻れない？

ってか、ここ異世界？異世界なの！？

日本でないの？地球でないの？

先輩との甘々な恋愛生活が！！！！

（いいいいーやああー！！！！！！）

声が出ないので心で絶叫。

やっとのことで告白OKもらって、その日の内に異世界召喚だなんて。

天国と地獄だなんて。

（ひどすぎる！！！！！！）

だが、状況はこれで終わりではなかった。

突然、ザワザワとさわがしくなる周囲。

そしてガチャガチャという音と、一際大きな声。

「全員つかまえる！一人も逃がすな！さからえば殺してもかまわん
！！！！」

え、何？悪い奴等、もう来ちゃったの？

魔王とか、倒されるまで城で待ってるもんじゃないの？

俺、体動かないよ？どうするの？というか、どうしたらいいの！？

その後はもう、大混乱としか言いようがなかった。

物が倒れる音とか、ガチャガチャいう音（どうやら金属鎧の音らしい）、ドシュツとかいうなんかやばげな音、助けを求める声、そして悲鳴。

（先輩、先輩、先輩……！）

目をつぶって現実逃避を続けていた俺は、いつの間にかあたりが静まり返っていたのに気づく。

そして、ゆっくりとこちらに向かって来るガチャガチャという音。

(ち、近づいてくる……!!!!)

その音が止まった時、恐怖に俺は思わず目を開いてしまった。そして目に映る、返り血に染まった金属鎧と真つ赤な剣(こゝろ)。

[illegible]

気絶しなかったのを褒めてもらいたいくらいだ。

今まで16年生きてきて、これほどの恐怖を味わったのは初めてだ。

「ム・・・！どうやら怯えさせてしまったようだな」

騎士風の男はそう言って剣をどこかにやると、にっこり笑ってきた。

正直に言つと怖かった。

何か、無理して笑い顔を作っている感じが。

「まったく、こんな年端もいかぬ娘を生贄にしようなどと」

娘？生贄？

何いつてんの？？？？？

騎士に抱き上げられた俺に見えたもの。それは、俺の体だった。

自由に動かないその体は・・・ちっちゃな女の子のものだった。

01話 「記憶喪失」

「本当に間に合ってよかった」

騎士はそういつて俺を抱きしめる。

男に抱きしめられる趣味などないが、体が動かないのだから仕方ない。

というか、鎧についた返り血とか付くからやめて。

血が、血が、血が！

(・・・)

いや、現実逃避はもうやめるべきだろう。

現実を見つめなければ前には進めない。

だとしても、だ。

(なんで女の子になつてんの!!??)

体が動かせないから見える範囲で確認するかぎり、4、5歳ぐらい。
い。

幼稚園レベルの幼女だ。

ストレートの長く青っぱい髪も見える。

勇者で魔王がファンタジーのはずなのに。

幼女に生贄ってなに。

もういやだ。先輩の所に返して!!

「隊長」

若い騎士がやって来た。

「どうした」

「制圧はほぼ完了しました。ですが、われわれの把握していない隠し通路があったようで」

「逃がしたか」

「4、5人ほどです」

話しこむ騎士たち。

というか、こいつ隊長だったのか。

「首謀者は逃がしましたが、コイツは回収できました」

若い騎士は手の中にある本を振ってみせる。

黒い立派な装丁の分厚い本で、とっても高そう。

「邪神召喚の書か」

「ええ。なんとか使われるのは阻止できましたね」

「まったく邪教徒どもは度し難い。それで、この娘の両親は」
「残念ながら」

え、ちょっと待って。

この娘が生贄で。

ここに俺がいるってことは・・・俺が邪神？

いやいやいや。俺はただの高校生ですから！善良な一市民ですから！！

何かの間違いですから！！！！

「まったくこんな物があるから、いらぬ騒ぎが起こる」

「ええまあ」

「燃やせ」

「いやでも魔術師ギルドに確認を取ってからでないと」

「かまわぬ燃やせ」

待つて、もしかしてそれって大事な物じゃないの？

主に、俺があつちの世界に帰るために！！

「わかりましたよ」

若い騎士はため息一つついた。

近くにあつた篝火の中に投げ込まれる真っ黒な本。
パチパチと音をたてて燃え尽きていく。

（あああああああああ・・・）

俺の意識はそこで途切れた。

（ここどこだよ）

次に目覚めた時に見えたものは、天蓋つきベッドだった。
わずかにだが、首を動かすことができた。

（おお・・・、少しだけだが体が動く）

あとは指先ぐらいか。しかしなんだ、このベッドは、
やわらかすぎて体が沈みこみそう。でも柔らかいのに適度な芯が
マットに入っているようだ。

ただ高価たかそうだなー、という感想しかでてこない。
庶民です。

（夢じゃなかったか）

どうしたらいいのか。

そもそも、もとの世界に帰れるのか。

でも俺、今、女の子なんだけど。帰っても女の子？

というより元の俺の体、今どうなってんの？

何もかもわからない。

情報、情報がほしい。

せめて体だけでも動いてくれたら・・・！

（先輩、待っててください・・・）

もう一度、周りを見渡そうとしたとき、その音は聞こえた。

コン、コンと2回。

（ノック？）

「失礼するわね」

視界の片隅に映っていた扉が開き、20代後半と思わしき女性が入ってくる。

髪は薄いブラウン。全体的にほっそりしていて、何が楽しいのかその顔には笑顔が浮かべられている。

彼女はニコニコしながらベッドに近づいてきて・・・俺の視線とぶつかった。

「起きたのね。体は大丈夫？」

それに答えようとして、俺は気づいた。まだ、声がでないことに。

「あ・・・、・・・あ・・・」

彼女はにっこり笑うと「いいのよ」と言った。

「まだ無理をすることはないの。ゆっくり、ゆっくりとね」

頭をゆっくりと撫でられて、眠気が襲ってくる。

どうやら体はまだ睡眠を欲しているらしい。

その手に安心を覚え、俺は再び意識を手放した。

・・・結局、言葉を話せるようになったのは2日後だった。

この2日間、世話になりながら聞いたところによると、この女性の名は『クリシュティナ・オクスタン』といい、この屋敷の奥方らしい。

そして、この屋敷の主人は救出隊の騎士の一人だそうだ。

（たぶん、あの人だろうな）

一人の騎士の顔が浮かぶ。

血まみれの姿しか見ていないせいか、このいつも笑顔の女性の旦那さんというのが、こうなんというかイメージが湧かない。

しかしながらこのクリシュティナさんは非常に面倒見がいい。この屋敷にはメイド（そうメイドだ）も何人かいるようなのだが、俺の世話は必ず彼女がしてくれる。

早くに母親を無くした俺にとってみれば非常にくすぐったかった。

「喉は乾いてない？お水飲む？」

「退屈じゃない？絵本でも読んであげる」

「こんな服はどうかしら。やっぱり女の子なんだから、かわいい服を着たほうがいいと思うの」

構いすぎな程だ。

その様子から思うことがあったが、あえて指摘はしなかった。その日の夕方、その男が帰ってきた。

「いくつか報告と質問がある」

まだベッドから移動できない為、それは俺の寝ているところで行われた。

例の騎士（やっぱり予想通り隊長だった）とクリシュティナさんと俺。3人だけだ。

旦那さんの名は『ベルフェ・オクスタン』というそうだ。

「まずは君の両親のことだが」

母親は亡くなりましたが、父親は元気ですよー、と思ったが理解した。

この体の、この女の子の両親。

「残念だが、二人ともお亡くなりになられた」

あの黒口・ブどもめ。怒りが湧く。

「その時の事、何か覚えているかね」

知らないし、答えられるわけがない。どうすればいいんだ。
とりあえず、首を横に振る。

「・・・確かにショックな事だからな。覚えていなくても仕方ない」

とりあえず誤魔化せたか・・・？

「では質問を変えよう。どこの国から来たのかわかるかね？」

何？地元民じゃないの？国って、この国の名前すら知らないよ！
また首を横に振る。

「ご両親共々、旅の途中で巻き込まれたようだな。運のない事だ」

「あなた、その言い方は・・・」

「ム・・・。すまない悪かった」

こちらは小娘なのにきちんと頭を下げた謝ってくる。
好感度アップだ。

「一時的に記憶を失っているのかもしれない。確かにこの年齢の子供にはショックが大き過ぎる」

「・・・」

「では、せめて名前ぐらいは覚えてないか？」

「あ・・・の・・・」

名前って、本名言うわけにもいかないし。
もう首を横に振っとけ。

「そうか・・・。だが、名前さえわからんとなるとどうするべきか・
・・・」

いやほんと、どうしたらいいんでしょうね・・・。

「だったらあなた」

クリシュティナさんはポンと手を打ち合わせる。

「記憶、そう記憶が戻るまで家であずかったらいかがでしょう」

さも今思いついたように言う。

でも俺にはなんとなく、そう言い出すんじゃないかと思っていた。

「いやしかし・・・だが・・・」

「ね、お願いあなた」

「・・・」

「ね、お願いあなた」

ベルフェさんはこちらに向くと、言いにくそうに訊ねてくる。

「あ・・・と。名前がないと不便だな。まあとにかく、君の方はどうだろう、記憶が戻るまでもいいから、この家で暮らさないか」
「あの・・・、えっと・・・」

どうするべきか。もとの世界に帰る事は決定でも、とりあえずの寝床はほしい。

帰り方を探すにしても拠点は必要だ。

「・・・ご迷惑でなければ・・・」

がばっ、という効果音が出そうなぐらいの勢いで抱きついてくるクリシュティナさん。

「だったら、ね、ね」

「どうした」

「とりあえずでもなんでも名前は必要だと思っの」

「それはそうだが」

「わたしが付けてもいい？」

ベルフェさんは重いため息をつく、こちらをちらりと窺う。

俺もコクリと軽く頷く。

「いいだろう」

「とっつってもいい名前があるの」

それはね。

「アフィニア。アフィニア・オクスタンというの。素敵でしょう」

02話 「家族」

この家にお世話になるにあたって、ひとつ注意しなければならぬ事がある。

それは俺が、俺であることを気づかせてはいけないという事だ。

なぜならば、彼らは儀式が失敗したと思っている。

よく聞いてみれば、やはりあの黒ローブどもは邪神を信仰する狂信者たちで、邪神を召喚することによってこの国を、延いては世界を破滅させようとしていたという。

呼び出されるはずだった邪神の名は『終末の破壊神エメランディス』。

世界の終わりに現れ、太陽を飲み込み、月を飲み込み、最後に大地を飲み込むのだとか。

どれだけかい口だよ、とあきれるが神話に文句をいっても仕方がない。

どちらにしても俺は破壊神ではない。

親戚にそんなおかしい人はいなかったし、地面とか食べる人もいなかったはずだ。

とにかく自分は破壊神とかではない。

では何か。

おそらく・・・、単なる想像に過ぎないが、あの黒ローブたちの儀式自体は成功していたのではないだろうか。

そして最後の最後に、まちがい電話をかけてしまったのではないか。

破壊神さんの自宅ではなく、この俺に。

そして俺はこの世界に呼ばれてしまった。
魂だけで。

この体の持ち主の魂は、あまり考えたくはないが、俺がこの体に入った衝撃で弾き飛ばすか押しつぶすかしたのだろう。別に俺のせいではないはずだが・・・罪悪感を感じる。

とにかく、もし俺が俺であることがばれてしまったら命は無いら
ろう。

事情を話した所で、納得などしてもらえそうにない。
だいたい何と言えればいいのだ。

「破壊神ではありませんが、別の世界の善良な一市民です。間違い
で呼ばれただけで、ちっとも邪悪ではないですよー」
召喚

とても言えればいいのか？
自分で言ってて無理だとわかる。

なので俺は、無害な一少女を装う。
背中がむずがゆくなるが、こればかりは仕方ないだろう。

「クリシュティナさん、おはようございます」

「おはよう。昨日は良く眠れた？」

「はい、ありがとうございます。おかげ様でぐっすり眠れました」

まだベッドから立ち上がれない俺に、甲斐甲斐しく世話をしてく
れる。

「いいのいいのよ、気にしないで。アフィニアちゃんはしばらく

この家で暮らすのだし遠慮なんかしちや駄目でしょ？」

「いえ・・・でも・・・」

「うん、まだ遠慮があるわね。あの・・・ね、お母さんって呼んでみない？クリシュティナさんって呼び方、なんとなーく余所余所しいでしょ？」

いや、余所余所しいもなにも他人だと思う。

「いくら覚えてないといってもご両親が亡くなられたばかりだし、不謹慎だと思うけれど」

でも出来れば呼んで欲しいな。
言葉には出さないが、何か圧力を感じる。

「お・・・お・・・、おか・・・、おか・・・」

小さいころに母親を亡くした身としては、母親経験値が不足ぎみなのだ。

レベルが高すぎる。

「おか・・・、おか・・・か、母^{かあ}さま」

何が違うのかはわからないが、この言い方なら俺の中の羞恥ゲージの上昇が低い。

『お母さん』は無理だ。

「んー、それでいいと思うの」

OKが出た。

「そのかわり、父さまの事も、父さまと呼ぶのよ？」

「・・・」

「そのかわり、父さまの事も、父さまと呼ぶのよ？」

今、二回言ったよね。

なんというか、・・・か、母さまは押しが強い。

いつもニコニコして争い事とか避けて通りそうなのに。

騎士の嫁っているのは、押しが強くなければならないものなのだろうか。

それとも、なったから押しが強くなったのか。

卵が先か、にわとりが先か。

「・・・と、父さま」

はい、よくできました。

柔らかい手で頭をなでなで。

なんという幸せ空間・・・！駄目だ、抵抗しないと。

（俺には、元の世界に帰って先輩とイチヤイチャするという野望が・・・！）

帰るために情報を集めるどころか、まだ満足に体も動かせないのですが。

（今はとにかく、動けるようになるのが先決か）

「まさか、こんなにかかるとは」

あの後、結局時間をかけて押し切られてしまい、正式な養女になっ
てしまった。

幼女の養女だ。

ごめん。物を投げないで。

彼女を……。クリシュティナさんを、母^{かあ}さまと呼んでから1年
自由に動けるようになるにはそれだけかかってしまった。

（もう先輩、俺の事なんて忘れてるだろうな）

告白OKした日に相手が失踪だなんて、どう思われているだろう
か。

いや、わずか、本当にわずかの可能性だが、元の世界とこちらの
世界では時間の流れが違うという可能性がある。希望を捨ててはい
けない。

それが例え、ほんの小さな可能性であろうとも。

まあいい。

しかし、ここまで回復に時間がかかるとは予想外だった。

病気とか、体力がないという話ではない。

医者の説明によると、体内の魔力が色々ぐちゃぐちゃになってい
たそうだ

魔力……。魔法。

ファイアーボールとかメテオストライクとかもあるんだろうか。
火球 隕石召喚

あんなのもあるのか。
あるんだろうな。魔力があるんだから。
話が逸れた。

とにかくそのせいで、体の意思伝達システムが麻痺していたらしい。
その上あまりにも複雑になっていたため、自然治癒しかないといわれたのだ。

これはあれか。
俺の魂のせいか。

何しろ、自分は破壊神なんぞではないとわかっているものの、少なくとも間違われるぐらいの存在。
10分の1、いや100分の1だとしても、この娘の体にとっては途轍もない負担だったのだろう。
だから、本来の魂を弾き飛ばした上、こんな体になってしまったのだろう。

あくまで予想だが。

動けないのならば、と言う事で、母^{かあ}さまや父^{とっ}さまに色々教わることにした。

知っておいて損はないだろう。
俺には目的があるのだし。

ベッドの上で寝たきりでもやれる事はあるはずだ。

たとえばこの国。

国の名は『ジンバル王国』。

海に面した、それなりに大きな国という事だ。

国境を接する国は3つ。

テューレ、アーリス、ノアの3国。

ここ10年ほどは戦争も無い。

平和な事だ。

平和万歳。

話が逸れるが。

ここ一年、ベッドに寝たきりで分からなかったのだが。

こちらの世界にはお湯につかる、という習慣は無いらしい。

普通は水風呂のようだ。

たしかに、お湯を沸かすというのは大変かもしれない。

気候的にこの世界は総じて暖かいらしく、水でも問題ないという

事だ。

元の世界ではシャワーが中心だった俺でも、入れないとなるとお湯を張った湯船がほしくなる。

これはなんとかしないとイケない。

寝たきりの間はどうしていたかつて？

母さまに、水に浸した布で拭いてもらっていたさ。

羞恥プレイだが、動けないので抵抗はあきらめた。

家族のスキンシップだ。

トイレ？聞いてくれるな。

そういえば学ばなかで知ったのだが。

なんとエルフやドワーフといった種族もいるらしい。

俺が勝手に言ってるだけで、エルフやドワーフといった名前ではないが。

耳長族とか、小人族とか言っらしい。

魔獣とか魔法生物とかいるらしいし、ファンタジーだ。

さあ行こう、夢と魔法と冒険の世界へ。

もう来てるけどね。

ただ、俺にかなりの魔力がある事を知った母^{かあ}さまが、魔術の訓練をしてくれることになった。

その方が治りが早いらしい。

今使えるのは初級も初級、明^{ライト}かりの呪文だ。

はじめて成功したときには感動したね。

魔法だよ、魔法。

母さまによると、俺は筋がとってもいいそうさ。

なんでも話によると、母さまは魔術の研究施設に勤めていたらしい。

実践よりは研究メインで、大魔術士とかではないそうだが。

そこで警備主任の騎士だった父さまと知り合ったとか。

のろけられた。

まあでも、その話を聞く内に予想が当たっていた事が判明した。

やはり、父^{とう}さまと母^{かあ}さまには子供がいなかったらしい。

それも、生まれてから亡くなったのではなくて、もとからいのないのだ。

どちらかだろうとは思っていたのだが。

するとこのアフィニアという名前は、いつか子供が出来たときのためにずっと温めていた物なのだろうか。・・・母さまに秘密を持っているのはとても心苦しいが、打ち明けられるたぐいの物ではない。

元の世界に帰るのは決定事項だが、はたして俺はこの新しい両親と笑って別れられるのだろうか。

「母^{かあ}さま、今日は新しい呪文を教えてくださいなのですが」

「明^{ライト}かりはもう完璧だし、そうね、加速^{クイック}Cなんかはどうかしら？」

「どんな呪文なのですか？」

「対象は自分だけだし、短時間だけど1・2倍のスピードで動けるようになるのよ。腕とか」

「それはすごいです」

その時にならないと分からない事だし。

・・・考える必要は無いのかもしれない。

今は、まだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3648z/>

アフィニア日誌

2011年12月15日15時52分発行